

朽久保哲男教授送別の辞

権田 恭広

東邦大学医学部眼科学講座（大森）医局長（助教）

朽久保哲男教授は、平成26年3月31日をもって東邦大学医学部眼科学講座（大森）教授を定年退職されることとなりました。先生は昭和51年に東邦大学医学部をご卒業された後、東邦大学医学部眼科学教室 大岡良子教授、河本道次教授のもとに入局され、大森病院に勤務されました。その後、助手・医局長を務められ、昭和60年から国立大蔵病院（現 国立成育医療研究センター）眼科に勤務され、昭和63年に東邦大学医学部眼科学講座講師、平成4年に東邦大学医学部眼科学第1講座助教授に昇任され、平成8年に東邦大学医学部眼科学第1講座教授に就任されました。

先生は緑内障・白内障・角膜疾患・未熟児網膜症など多岐の専門領域の他、眼瞼・涙道・網膜硝子体など多くの分野の診療に携わり、また日本白内障学会評議員などの学会活動や研究を続けられ、その経験・知見を惜しみなく医局員に指導してこられました。先生は私が入局した時には松橋正和教授とともに教室の“ボス”であり、以来ずっとご指導いただきお世話になっております。術者として最初の白内障手術の時も先生に指導についていただき、大変心強く思っておりました。術中に突然眼が動いたために生じた後囊破損で固まる新米術者を優しくしっかりとリカバーしていただき、翌日の診察で良好な視力となった術後眼をみることができたことは忘れられない思い出です。その後も多くの後輩医局員が術者として成果を上げることができているのは、先生の手術指導の賜物と存じます。先生の手術の助手について特に印象深いこととしては、難しい症例で手術が長時間になっても集中を切らすことなくひたすら粘り強く丁寧に手技を行っておられる姿勢で、この忍耐強さはなかなか真似できないことと感じたと同時に見習わ

なければならぬと思ったものです。

先生の故郷である福島県相馬郡小高町（現 福島県南相馬市小高区）に出向した際には、申し送りのために最初に訪れた時に宿泊した常磐線小高駅前の旅館で客は先生と私の2人しかおらず、大広間の10メートル以上あるような長いテーブルの隅っこで先生と2人だけで朝食をとったことが思い出されます。東京生まれの私には随分田舎に感じられたものですが、地元の人々に暖かく迎えていただき、盆の時期には先生のご実家にもお伺いする機会もあって大変良くしていただきました。海の幸もお酒も大変おいしく、私が東京に戻ってきた時にはだいふ太ったとよく言われたものです。そんな先生の故郷も東日本大震災で被災され、しばらく立ち入ることができなくなった時期には相当ご心痛もあったことと思われま

す。先生は、医局員が困っていることはないかとほぼ毎日、20時頃に医局に立ち寄られ、そこでよくテレビで野球をご覧になっていましたが、巨人が勝っているととてもご機嫌だったように思います。最近は地上波でのプロ野球中継は少なくなりましたが、かわりに年1回大学眼科医局対抗の野球大会で試合をすることをとても楽しみにしておられました。ある時はホーム突入のクロスプレーで足を骨折されたほどで、あまりの熱の入りように医局員は毎年怪我をされないよう気をもんでいたものです。

そのように雰囲気の良い医局を築いてくださった先生も退任されることとなりました。ここに長きにわたってのご指導と東邦大学医学部眼科学講座へのご貢献に感謝申し上げますとともに、先生のご健康とご多幸を医局員一同、心から祈念いたしております。今後とも引き続きご指導のほどお願い申し上げます。